

## 子育て世代包括支援センターとの連携による 大学発アートを取り入れた予防的教育

正保 正恵<sup>(1)</sup>・渋谷 清<sup>(1)</sup>・古山 典子<sup>(1)</sup>・上山 瑠津子<sup>(1)</sup>・山内 加奈子<sup>(1)</sup>・  
田中 直美<sup>(1)</sup>・渡邊 真帆<sup>(1)</sup>・弘田 陽介<sup>(2)</sup>

今回の実践の下敷きにしたのは, Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska (2022)『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』である。大学に市井の人々が集まり, 議論や一緒に楽しむ機会を上手に作っている場所はまだまだ多くはないだろう。Art & Careに関心を持つ教員がそれぞれの専門を生かしながら, 妊婦やその夫, 育児中の親たちに向けて内容を吟味し, 連続講座を開いた。広報にはネウボラ推進課の支援を受け, 大学と地域の行政が連携した異分野グループによるパイロット的ワークショップの参加者の感想においてThe AHRC Cultural Value Project の研究成果に基づく「個人の内省」, 「アイデンティティ」, 「主観的幸福感」などの効果がみられた。地域の妊娠中の女性及び家族支援を行っていくという機会をさらに増やし, 大学側の変革をも生み出しながら幸福をともに追求していく姿を求め, 市民に真の学びを提供していくことに大きな意味が見出された。

キーワード: アート, ケア, 個人の内省, アイデンティティ, 幸福感

### 0. 問題の所在

#### 1. 本研究の目的

子育て世代包括支援センター(主として妊産婦及び乳幼児並びにその保護者を対象とし, 妊娠期から子育て期にわたり, 母子保健施策と子育て支援施策を切れ目なく提供するため, 実情を把握し, 妊娠・出産・育児に関する各種の相談に応じ, 必要に応じて支援プランの策定を行う場所)と, 福山市においても2021年から市区町村子ども家庭総合支援拠点(管内に所在するすべての子どもとその家庭及び妊産婦等を対象とし, その福祉に関し, 必要な支援に係る業務を行い, 特に要支援児童及び要保護児童等への支援業務の強化を図る場所)2つの機能を担い, 一体的に支援を実施することが求められている。

二本立てで子育て支援が行われる中であって, 本研究の目的は, それらの拠点と連携しながら妊娠期・子

育て期の親に対してアート(音楽・美術・製作・メンタルヘルス・ボディワークなどのアート)を通した虐待予防的な学びをプログラム化し, 間接的なアートと直接的な言葉による講義を重ねることで, 個人や社会にもたらす変化について考察する。

方法としては, Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska (2022)『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』による実証的研究を下敷きに, それぞれの専門分野による講座を開きながらの参与観察と参加者からの感想をまとめた。参加者が少なく実証的なデータにはなりにくい, 実証的研究に照らして文化的価値を内面化することで, 安心・安全な子育て・子育てが行える兆しを求めた。また, 研究者それぞれの専門分野として, どのような理論に基づき本研究にコミットしていくかの理論も踏まえ, 各分野の実践の内容と観察した変化について言及する。

<sup>(1)</sup>福山市立大学教育学部児童教育学科

<sup>(2)</sup>大阪公立大学大学院文学研究科人間行動学専攻

## II. プログラム

全体のプログラムは、以下のとおりである。

表 1：全体プログラム

	タイトル	担当	タイトル	担当	タイトル	担当
9月2日	はじめに、自己紹介、アートミーツケアの考え方	正保 ほか	音でのやりとりを楽しむ	古山	対話で新たな考えを得ることを楽しもう	田中
9月9日	体が落ち着くボディワーク	弘田	横かしの絵具あそびを味わう	渋谷	イラッとする時の対処法	山内
9月23日	心が落ち着く宵守り刺繍	正保	赤ちゃんを迎える環境づくりのヒント	渡邊	赤ちゃんの発達って面白くない！	上山

## III. 具体的講座内容（講座の進行順）

### 【1】音でのやりとりを楽しもう 一音での対話—

古山典子

#### 1. 理論編

##### （1）音を聴く力と人の育ち

出生前の胎児の聴覚は早くから発達し、生後数時間で母語とそれ以外の言語を聴き分けるといふ。これは、人が出生前から「聴いて」学んでいることを示している。

2009年に、発達心理学者のMalloch, S. とTrevvarthen, C. らは、間主観性の生得的基盤に位置づくものとしてCommunicative Musicalityを提示した。この理論の特徴として、人同士のつながりの根源を乳児と養育者間のやり取りに見いだし、人は生まれながらにして音楽的であると捉える点、また、その音声的なやり取りには、音声のリズムやビッチの同調や呼応、やり取りのナラティブ構造といった音楽的現象が見られ、あらゆる学びと育ちの基盤となることを指摘している点が挙げられる。

Communicative Musicalityに見られるように、人が生まれ育つ過程において、声を含む「音」は他者とのコミュニケーションの基盤を担ってきた。実際に、乳児は歌声やマザリーズを好み、ヴォーカルプレイで声を発する準備を行い、他者とマルチモーダルかつ双方向的なコミュニケーションを通して社会性の基盤を築いていく。これについて今川恭子（2020）は、「乳児のごく早期から見いだされる音楽への高い感受性は、音楽することが人に備わった生得性に基づくものであること、つまり人として在るために必然的にもち続けた能力の発現であることの証と考えうる」と指摘する。それはつまり、声を含む音を通して他者とかかわることは、人が社会的・文化的な存在として育つ道筋として重要な意味があり、人として在ること、生きることそのものに深く根ざしていることを意味する。それゆえに、人にとって音を聴き（感じ）、受け止めることが極めて重要な営みであることは明らかである。

##### （2）人が「音を聴く」ということ

中村美恵（2010）によれば、どのように音楽を聴くかを過去の体験との関係（＝「身体記憶」）によって学んでいるという。音同士の関係もまた、身体記憶に基づいて理解しており、音楽の知覚が身体記憶と相互作用しながら「感情」を生むという中村の見解は、身体を通した実体験の重要性を示唆している。つまり、マルチモーダルに音とかかわることによる身体記憶が、音楽聴取、ならびに表現を支え、鋭敏な知覚と身体動作能力の獲得につながるものと考えられる。

これらを踏まえ、本実践ではまず「音」そのものに集中して知覚し、対峙する活動を行い、その後他者が鳴らした音を、聴覚、視覚はもとより、身体全体を用いて受け止め、自らも他者に対して音を鳴らす・鳴らし合う活動を構想した。これは、音とかかわることがマルチモーダルな営みであることの理解を促し、他者とかかわることにおいて音がもつ意味を問うことを意図するものである。

## 2. 実践編

### （1）進行表

進行表 1：音を聴く力と人の育ち

	時間	アクティビティ	支援と準備物
導入	5分	1. 音を使ったゲームを楽しむ ・音まわし（手拍子、声） ・音の手渡しゲーム	配付資料
展開	35分	2. 音の響きを可視化する Chrome Music Lab “SPECTROGRAM”を用いて、音を「見える化」する。 3. 自分の好きな音探し—自分と音との対話 「2」で使った音が長く響く楽器を使用する。 サウンドブロックは楽器、派生音を含め、音高順ではなくランダムに机の上に並べ、各自が音を確かめながら自分の「お気に入りの音」を見つける。 4. 音を介した他者とのコミュニケーション ・参加者は全員で一つの円になり、「3」で選んだ音を一人ずつ鳴らしていく。前の人からの音が鳴り止んだと思った時に、自分の選んだ音を任意の音の大きさで隣の人に向かって鳴らす。 ・次に、任意の他者に向かって音を鳴らす。 意図：音をどのように発するかという思考は身体性に深く関連しており、右手の指の動かし方や目の使い方を含めた身体の動きとともに音の響きが生み出されること、また他者からの音の指向を全身で受け止め、自らもまた他者に向けて音を発するという活動を通して、音による対話を体験する。	PC 楽器 シンギング・ボウル サウンドブロック スリットドラム エナジーチャイム フレクサトーン
まとめ	5分	5. 音を介した他者と音を介したかわりについて	

##### （2）本実践での参加者の変化

この実践は、参加者がそれぞれ自分の好きな音高の音具を持ち、他者に向けて音を届けるように鳴らすというものである。そして、他者が鳴らした音が自分に向けられたと思う参加者はその音を受け止めると同時に、さらにほかの他者に向かって音を鳴らす。どのような音でも「ミス」がそもそも存在しないという安心感の中で、参加者たちはどのような音を誰に届けたいのかに集中し、その思いを音として表現するために、自然に身体性が伴う形で音のやり取りが行われた。そ

れは、音楽表現の本質の姿といえるものであった。

## 主要な引用・参考文献等

- ・今川恭子 (2020)「音楽性の発達的な変化―第一次の音楽性から第二次の音楽性へという仮説―」今川恭子編『わたしたちに音楽がある理由―音楽性の学際的探究―』音楽之友社, pp.196-208.
- ・中村美亜 (2010)「＜音楽する＞とはどういうことか?―多文化社会における音楽文化の意義を考えるための予備的考察―」『東京藝術大学音楽学部紀要』36, pp.161-178.
- ・Malloch, S. & Trevarthen, C. (2009). *Communicative Musicality: Exploring the basis of human companionship*, Oxford University Press. (邦訳: 根ヶ山光一・今川恭子 ほか監訳 (2018)『絆の音楽性―つながりの基盤を求めて―』音楽之友社)

## 【2】 対話で新たな考えを得ることを楽しもう

田中直美

### 1. 理論編

#### (1) 共に生きる体験としての哲学対話

近年、日本の学校教育においても実践の機会が増えてきている哲学対話は、マシュー・リップマンをはじめとするアメリカの哲学者たちが、1960年代末から70年代にかけて開発した「子どものための哲学(Philosophy for Children:P4C)」を主な源流として発展してきた(土屋2023, 142)。一般的に「哲学」というと、いわゆる「知識」として学ぶもの、つまり「哲学(philosophy)」という一つの専門分野が想定されるだろうが、哲学対話においては、いわば「哲学する(philosophize)」というみずから「体験」するものが、「哲学」の意味として捉えられている(梶谷2018, 12)。「共に問い、考え、語り、聞くこと」という、「共に考える営みとしての哲学は、人が生まれた直後から始まり、まさに人と人が共に生きていくことそのものなのである」(梶谷2018, 13)。

このように、「共に問い、考え、語り、聞くこと」という体験が「哲学」であり、さらに「人と人とが共に生きていくことそのもの」であれば、哲学対話を体験することが他者と共に生きる方途を見出す機会になると考え、実際に本講座において哲学対話を実施する。

#### (2) 問いあうことと安心・安全な場

では、「共に問い、考え、語り、聞く」という体験

はどのように体験されるのだろうか。梶谷によれば、①何を言ってもいい、②人の言うことに対して否定的な態度をとらない、③発言せず、ただ聞いているだけでもいい、④お互いに問いかけようにする、⑤知識ではなく、自分の経験にそくして話す、⑥話がまとまらなくてもいい、⑦意見が変わってもいい、⑧分からなくなってもいい、という8つのルールが「全体として対話を哲学的な探究に変える」(梶谷2018, 47)。こうしたルールの設定は、日常生活において共に生きていくことの難しさを反映しているとも捉えられるだろう。例えば、日常生活では、「どうしてこんなこともできないのか」「何で間違えたんだ」など、相手を攻めていたり不満や文句を言うことが多いだろうし、「正しい」答えが求められている場合には質問すると先生や上司が不機嫌になったりすることもあるだろう。だが、「何でも質問していい」という知的安心感(Intellectual safety)があつてはじめて「思考を深めたり広げたりする探究になる」(梶谷2018, 67)のである。

#### (3) 「不思議さ」を携えて<sup>(1)</sup>

また、問いの答えが在ることは想定されているが、まだその答えがないような一つの問いについて探究しあう哲学対話においては、その問いに参加者は皆問いかけられており、唯一正しい答えを誰も持っていないがゆえに、参加者は互いに問いあい考えることができる。このような問いそのものに含まれている「わからなさ」や「不思議さ」こそが我々を互いに切り離すと同時に結び付けているものでもあるだろう。日常生活の中で出会う「不思議さ」を携えて「共に考える」者として他者へと向かうことが、安心・安全な子育てや子育てへと向かうヒントになるのではないだろうか。

## 2. 実践編

### (1) 進行表

進行表2：対話で新たな考えを得ることを楽しもう

	時間	アクティビティ	支援と準備物
導入	5分	<b>1 哲学対話についての説明</b>	配布資料
展開	35分	<b>2 名刺づくり</b> この場で呼ばれた名前前で名刺を作成する。	名刺 椅子
		<b>3 自己紹介</b> 全員の顔が見えるように車座で座り、一人ずつ「この夏の一番の思い出」を話し、それについて反対側に座っている人がする質問に答えて、自己紹介をおこなう。	コミュニティーボール
		<b>3 問い決め</b> 一人ひとつ、この場に参加しているみんなと考えたい問いを出し、その理由も伝える。多数決でみんなで話し合う問い一つ決定する。	ホワイトボード ルールの紙
		<b>4 対話</b> 対話のルールを確認し、決まった問いについて話し合う。	
まとめ	5分	<b>5 ふりかえりシート</b> 安心・安全な環境づくり 言葉を介したかわり	

## (2) 本実践での参加者の変化

本実践では、参加者がそれぞれ呼ばれたい名前で呼び合い、一つの問いについて話あうことで、上述の「哲学する」体験をおこなった。日頃の属性から離れ一個人として「共に問い、考え、語り、聞くこと」が参加者にとってどのような変化をもたらしたかについては、今回のふりかえり等では何うことができなかったため定かではないが、特に妊娠・出産・育児に際し多くの「不思議さ」に出会う度に、自らに閉じこもるのではなく、哲学することで安心・安全な他者との関係づくりへと通じていく方途が見いだされるのではないだろうか。

### 注

(1) 本節は、下記の論文を和訳し、特に第三節と結論部分を本研究に合わせて大幅に縮小及び改訂したものである。  
Tanaka, Naomi, “From Wonder to ‘Co-Existence’: Rosenzweig’s Concepts of Monologue and Dialogue”, in *Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan*, vol.7. 2023, 177-191.

## 主要な引用文献

- ・梶谷真司(2018)『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』幻冬舎
- ・立花幸司編(2023)『徳の教育と哲学:理論から実践、そして応用まで』東洋館出版社

## 【3】体が落ち着くボディワークー安心を育む身体技法ー

弘田陽介

### 1. 理論編

#### (1) 妊娠・出産をめぐる状況

妊娠・出産という人類が脈々とおこなってきた営みは、今日、医療の場において執り行われるものになっている。日本においても1950年台に出産の場は自宅から病院・診療所へと移行し(厚生労働省 2023)、以降その安全性は医療によって担保されるものとなっている。国家・社会の近代化に伴い、かつては家庭で行われてきた(今日の目から見ると家庭で行わざるを得なかった)出産が医療機関によって行われることになり、言うまでもなく、出産時の母親・乳児の死亡件数は劇的に減少し、人々は医療機関に絶対的な信頼を寄せるようになった。だが、近年、多くの妊娠・出産に向かう人々は、かつてのような信頼を医療および国

家・社会に対してもち得ているだろうか。医療は年々進歩し、安心・安全を揺るがすような事態は起こっていない。にもかかわらず、当事者たちを苛む不安は、ますます増大しているように思われる。医療が進み、個人はより最適化した選択を行うことが可能になっている。だが、その医療の専門化および進歩に人々は追いついていない。例えば、出生前診断は手法、精度など進展を遂げたが、それをどのように当事者が受容するかの議論は追いつかないままであり、様々な従来からの課題と連関し、新たな問題を生み続けている(横山 2021)。このような事態は、医療のみならず社会の各方面において、ベックらが「リスク社会」論および「個人化」論として20世紀から描き出したことであるが(ベック 1998, ベック/ベック＝ゲルンスハイム 2022), 2000代以降のインターネット, PC, スマートフォンの普及によって、より一人ひとりの当事者を苛むこととなった。科学の進歩や情報の増大は、人々をエンカレッジするのみならず、それ以上に不安を与え続けている。その不安の中で妊娠・出産の当事者は押し潰されそうになっている(弘田 2023)。そのような状況下において、さらに情報によって不安を打ち消すのではなく、わたしたちの等身大の身体を通して安心をどのように得てもらうかが課題ではないかと実施者は考え、ここで示すようなワークショップ「体が落ち着くボディワーク」を企画している。

#### (2) 安心を育む身体技法

様々なストレスコーピングが、近年、伝統的な身体技法から生み出されている。例えば、ヨガにベースをもつマインドフルネスは、その一つとして、広く受容されるものとなってきている(カバットジン 2007)。ワークショップ実施者である弘田は、日本の古典的な文化の所作や技に落ち着きの感覚を見出す身体技法を体験してもらうことを試みた。それらの体験を素材として用いて、落ち着きの感覚の一端を得てもらい、そこから身体を通した安心をそれぞれの身体で育んでもらえればと考えている。また、その落ち着きの感覚とは、日本の古典的な文化が美として保持してきたものである。例えば、茶の湯の実践者は、茶を飲むことを通して、落ち着きの感覚を得ることまでを一揃いの芸術として追求している。ここでの身体技法も、一つ一つのワークである種の落ち着きの感覚(調和の感覚と

でも言えるだろうか)を体験してもらうことを含み込んでいる。

## 2. 実践編

### (1) 進行表

進行表3：体が落ち着くボディワーク  
ー安心を育む身体技法ー

	時間	アクティビティ	支援と準備物
導入	5	趣旨説明	マットに座ってもらう。
展開	35	1 正座の型について体験してもらう。ある型をうまく取ることによる腰や腰の落ち着きを感じてもらう。 2 それぞれの参加者の腕組みの癖を認識してもらい、通常とは違う組み方での落ち着きを見出してもらう。 3 いくつかの小さな物(石やアクセサリ)などを参加者が気のすむように配置してもらう。それをベアになる参加者が少し動かし、別の感覚を得てもらう。それを数回繰り返すことによって、感覚の共有を行う。	一緒にワークに参加してもらう。
まとめ	5	言葉を介したかわり	感想を述べてもらう。

### 主要な引用・参考文献等

- ・厚生労働省(2023)「人口動態調査 人口動態統計 確定数 出生」2023年公表分。<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003411600>
- ・弘田陽介(2023)「リスク社会と個人化の中で親性を育む」『大阪公立大学文学部教育学研究室・教育学論集』48
- ・横山尊(2021)「出生前診断の歴史と現在ー自発的優生学の系譜」『日本健康学会誌』87(4)
- ・J. カバットジン, 春木豊訳(2007)『マインドフルネス ストレス低減法』北大路書房
- ・U. ベック, 東廉, 伊藤美登里訳(1998)『危険社会 新しい近代への道』法政大学出版局
- ・U. ベック/ E.ベック＝ゲルンスハイム, 中村好孝他訳(2022)『個人化の社会学』ミネルヴァ書房

### 【4】懐かしの絵具遊びを味わう

渋谷清

#### 1. 理論編

##### (1)「創造性＝つくり出す力」と「遊び」

砂場で遊ぶ子どもたちを目にすると、あれよあれよという間に山ができ川が流れ、人や動物の住む町などがムクムクと立ち上がり、それまで単なる“砂の置き場”だった所が生き生きとした世界へと一変する。未だ形の定かではない世界に働きかけながら、そこに自分なりの形や意味づけをしてゆく子どもの砂場遊びの様子は、人間にとっての根源的な「創造性＝つくり出す力」を強く感じさせてくれる。人間の持つこの創造性の大きな支えの一つに“つくり出す力”と深く関わる造形活動がある。幼児～児童期の造形活動としての

「造形遊び」とは、材料に働きかけ、自分の感覚や行為などを通して形や色などを捉え、そこから生まれる自分なりのイメージを基に、発想や構想をいわゆる「遊び」での試行錯誤同様に繰り返していく中で、創造的な造形力や思考を育むものである。

##### (2)「心の解放」としての絵具あそび

造形的な活動は創造的な造形力の発達に有用なだけではなく、ものを使って自由に表現することは心を解放する(横, 2008)一面もあるのではないかと。また、戦後の創造主義の造形教育においては、「抑圧された子どもの心を解放する」ことが大切な目標とされ、表現のプロセスを重視した(永守, 1999)ように自らの手を使い、ものに働きかけ、色や形のイメージの痕跡を残すこと、あるいは自らのイメージをそこに見出してゆくことは、人間にとって原初的な体験に近いものでもあり、心の自然を取り戻す行為なのかも知れない。

本講座で取り上げた 絵具あそびは、既に「造形遊び」の一つとして幼児期から児童期の美術教育の中でも広く取り組まれていることである。この活動を通して 色や形や様々な材料に親しむことを目的としているわけだが、一方で「心の解放」を活動の効果としても十分にその効用が期待できる。実践では特に色や形に対して 直接的な関わりを意図した3種類の絵具あそびを体験した。

## 2. 実践編

### (1) 進行表

進行表4：懐かしの絵具遊びを味わう

	時間	アクティビティ	支援と準備物
導入	5	1. 造形あそびと絵具あそび ・造形あそびとは ・体験する絵具あそびについて	○材料・用具 ○作例
展開	35	2. 「染め紙」を体験する ・絵具の吸い込みのよい和紙/半紙を蛇腹折りに紙片にする ・染める色や染み具合をイメージしつつ紙片に絵具をつける ・現れる色の混ざり具合、模様を楽しみながら紙片を広げる 3. 「ビー玉」を体験する ・絵具をつけたビー玉を紙がす隙間のトレーを色画用紙を折って作る ・絵具の中にビー玉を入れ、レンジですくいてトレーに投入して転がす ・ビー玉を動かしながら、軌跡についていく線や形、色を楽しむ 4. 「糸引き絵」を体験する ・絵具を含ませたタコ糸の端を持ち、二つ折りにした紙にはさむ ・一方の手で紙をおさえ、糸を上下に引き回しながら徐々に放く ・手の下で動く糸の感触や音も感じつつ、紙を開き対称図柄を楽しむ	○ポスターカラー 赤/黄/青/緑/紫/空/橙 ○用紙 色画用紙/和紙/半紙/上質紙 ○ビー玉 ○レンジ ○タコ糸
まとめ	5	5. まとめ ・体験参加者の作品を相互観察しながら味わい、活動を振り返る	○作品

##### (2) 本実践での参加者の様子

参加者からは、「絵具を扱うのが久しぶりで楽しく、



改めて新鮮な感じがした」などの感想が得られ、目の前に広がる色や形に集中し、夢中になって取り組む姿が見られた。講座終盤では、互いの作品を眺めながらのコミュニケーションも生まれ、本実践の目的とした「創造的な絵具あそびを通した心の解放」を、参加者が互いに楽しみながら味わう機会となり得たのではないだろうか。

## 主要な引用・参考文献等

- ・上中良子(2012)「『表現』…それは、誰のもの？ー学習指導要領に繰り返し強調される「造形あそび」をきっかけとした考察ー」『京都橘大学研究紀要』第38号, pp.230-258.
- ・永守基樹(1999)「子どもの心をいつも元気に一癒しの教育としての「幼児造形教育」」永守基樹・清原知二編『幼児造形教育の基礎知識』建帛社
- ・横英子(2008)『保育をひらく造形表現』萌文書林

## 【5】イラっとするときの対処法

山内加奈子

### 1. 理論編

#### (1) 妊娠とストレス

一般的に妊娠は喜ばしい事象だが、一方で高いストレスにさらされることも知られている。Holmesら(1967)の社会的再適応評価尺度によると、妊娠はストレスフルなライフイベントとして12位にあげられている。以前は、外見上「妊婦」と分かることによって、周囲からサポートを得られていた(添田ら, 2017)が、コロナ禍以降では感染対策のために妊婦に対してコミュニケーションを避ける傾向にある。そのため、対人関係が限定的になりやすいので身近な人との関係が重視される。先行研究(添田ら, 2017)でパートナーとの良好な関係がストレス対処に重要な役割を果たしていることが明らかにされている。そのため、コロナ禍において妊婦の感情コントロールやパートナーを含む身近な人とのコミュニケーションやストレス対処は喫緊の課題であると考え、本講座を着想した。

#### (2) 怒りの感情

怒りとは、ほとんどの人が1週間のうち1, 2回は経験する(大淵ら, 1984)と考えられており、人として自然にわきあがる感情であると言える。しかし、日本は欧米と比較して集団主義の文化であるため和を重

んじていること(Triandis, 1994)や、他者の気持ちを察すること(北山, 1998)を重視し、さらには自己抑制を求める文化の中で攻撃的な欲求を感じてもそれを表出することを避けること(加賀, 1979)が指摘されている。一方で、怒りは対人関係だけではなく、心身に悪影響を及ぼすこと(鈴木ら, 1994)も知られている。怒り感情を抑制することは血圧を高める(Diamond, 1982)ことなども示唆されており、胎児への影響が懸念される。怒りは抑制以外にも、アサーションを活用して相手と対立することなく自分も相手も大切に自己を表現(平木, 1993)する方法もある。場合によっては怒りによる攻撃性の低減よりも、向社会的な行動の増加を介入の焦点とするアプローチ方法もある(Crick, 1996)ことから、様々な対処法を知り本人にあった有用なアプローチを知ることが肝要である。これらのことから、感情の発達や怒りが生まれるメカニズムを説明した上で、怒りの感情との向き合い方や取扱い方について説明するとともに、ワークを通じてコントロール可能な感情であることを体験学習するプログラムを組んだ。

### 2. 実践編

#### (1) 進行表

進行表5：イラっとするときの対処法

	時間	アクティビティ	支援と準備物
導入	10	乳児の寝覚と聴覚を知る 感情の発達 妊娠の不安やストレスの原因	PPT
展開	25	怒り正体 現実と期待のズレに対して自分が怒りを生み出している 怒りのメカニズム 対処法 自分の価値観や常識を見直す アサーションを使って自己表現することを練習 など	PPT 配布物への記入
まとめ	5	自分の感情はコントロール可能であることを知る 感情の伝え方や対処法を実践	PPT

#### (2) 本実践での参加者の様子

参加者から、日常の中で「なんとなく」実践していたことを理論化して理解することで、自分のコミュニケーション方法に自信がもてるようになりそうだという声を得た。また、怒りのメカニズムを知ったことで、自分を俯瞰して見ることができ、怒りを軽減できそうだという感想もあった。これらのことから、妊産婦でホルモンバランスの変化や精神的な不安による感情の揺れがあっても、感情コントロールや適切な対処で対人関係を保ち、互いの存在を肯定し合う関係を築くヒントを得たと考えられる。

主要な引用・参考文献等

・鈴木平, 春木豊 (1994) 「怒りと循環器疾患の関連性の検討」『健康心理学研究』7(1), pp. 1-13.

・添田梨香, 上田公代 (2017) 「妊娠中のストレスとストレス対処に関する研究」『女性心身医学』21(3), pp. 306-313.

・Holmes TH, Rahe RH (1967) 「The social readjustment rating scale」『Journal of psychosomatic research』11(2), pp. 213-218.

【6】心が落ち着く背守り刺繍

正保正恵

1. 理論編

(1) ヒトとモノ、ヒトとヒトとの関係から、〈ヒトとモノ〉と

〈ヒトとヒト〉との関係の見える化

今までの科学や教育は、ヒトとモノの関係（自然科学に根差した研究と学習）、ヒトとヒトとの関係（人文科学、社会科学に根差した研究と学習）を中心に進められてきたといえる。しかしながら、ヒトとヒトとの関係を繋げる媒介としてのモノを「見える化」することで、私たち自身の生活はどのように変貌していくだろうか。

例えば、誰かのための作る食事、誰かのために整える部屋、といったことは考えれば普段多くの人たちがやっていることだが、それらの何気ない「誰かのためのモノづくり」を、あえて、より意識的にして、モノがヒトとヒトを繋ぐことを知って、誰かのために、「誰かのココロにも届けるモノづくり」という枠組みを作ることによって、多くの人にとって難解に見えていた学問や教育が、一気に色づいてカラフルなものに見えてこないだろうか。

(2) 背守り刺繍とは

起源については諸説あるが、江戸時代には一般的に伝わっていたとされる、赤ちゃんの産着である「一つ身」の背中あたりに、縫い目をつけた「魔除け」の印を背守りという。

読み方は、「せもり」という地域もあれば、「せまもり」という地域もあるようだ。大人の着物にはある背中の縫い目である「背縫い」の目によって、後ろ側にも「目」があり、その「目」が人々を守っていると

いう、現代のわれわれが聞けば非科学的な迷信の類になるお話だが、天災や人災、疫病など決して安全ではなかった日常生活の中で編み出された安心のための知恵だったと思われる。

それが子どもの着物は背中の中真ん中で縫合わせることなく縫うことで逆に「目」を付ける必要があり、主に母親たちは我が子のために祈りを込めて「背守り刺繍」を行ってきた。それが、昭和の初期ごろまで日本の各地で伝わってきた、気持ちを伝える布仕事である。

ひるがえって現代を生きる私たちにも、天災や人災の脅威は等しくあり、リスクマネジメントの知識や技術を学ぶとともに、大切な人への祈りを込める刺繍が心の安定につながるということもあると思われる。

(3) 現代にも通用する生まれてくる子どものための背守り刺繍

昭和初期まで様々な地方で続いていた背守り刺繍の風習は、乳幼児の死亡率が高かった時代においては、子どもを産む親たちにとって切実な祈りだったと思われるが、2010年代になって、それら江戸時代・明治時代の背守りにスポットライトを当てた試みが登場する。それが、下中菜穂『【背守り】練習帖』と雑誌『暮らしの手帖』2010年47号である。いずれも、鳴海友子さんの素晴らしい背守りコレクションが取り上げられており、鳴海さんがこよなく愛する気持ちがそれを紹介する方々に伝わり、筆者（正保）自身もそれらを読んで触発された当時広島大学大学院生だった梶山曜子さんの背守りに関する研究に加入させていただいたときにはじめて知り、取り組み始めた次第である。

2. 実践編

(1) 進行表

進行表6：心が落ち着く背守り刺繍

	時間	アクティビティ	支援と準備物
導入	15分	<b>1 背守り刺繍とは</b> ・テーマについての議論を聞く ・刺繍の方法を聞く	PPT、刺繍グッズ、図案集
		<b>2 デザイン選択あるいは創作</b> ・デザインを図案集から選択あるいは創作して布あるいは直接産着に写す ・裏に接着芯を貼る	
展開	65分	<b>3 刺繍をする</b> ・刺繍を行う ・刺繍をしながら背守り刺繍の歴史や現代的な意味付けなどを聞く ・再度接着芯を裏からかぶせ、アイロンで抑える	図案集、刺繍グッズ、産着
		<b>4 まとめ</b> ・作品のお披露目会：それぞれに作品への思いを語りながら他の参加者に披露する	

(2) 本実践での参加者の変化

実は時間配分が甘かったため、時間内に収まらず次の講座でも聞きながら手を動かしていた参加者がいたが、それぞれ集中して刺繍をされていた。感想も「チクチクが楽しかった。」「忘れていたが手を動かすことが新鮮だった。」といった前向きなものが多かった。図案の通りに手を動かすこと、完成していく様を見ながら進めることの中に喜びがあるのではないか。

主要な引用・参考文献等

- ・梶山曜子, 中村 啓子, 魏 曉敏, 竹吉 昭人, 正保 正恵, 村上 かおり, 鈴木 明子(2020)「地域から支える家庭と子どもの生活技能教育プログラムの構想：親と子の「背守り」刺繍体験講座の実践から」広島大学大学院人間社会科学部研究科紀要, 教育学研究 1 588-597
- ・下中菜穂(2010)『【背守り】練習帖』(株) エクスプランテ
- ・LIXIL ギャラリー企画委員会(2014)『背守り 子どもの魔よけ』株式会社 LIXIL

【7】赤ちゃんを迎える環境づくりのヒント

渡邊真帆

1. 理論編

(1) 赤ちゃんにとっての身近な環境

人は、様々な環境とかかわりあって生きている。ブロンフェンブレナー (Bronfenbrenner, U.) (1996) は、人を取り巻く環境を、関係性の視点から入れ子構造で整理した。関係の濃淡は多様であるものの、家庭内の関係、家族が通う学校や職場との関係、家族とご近所との関係、そして社会情勢や文化なども取り巻く環境として捉えた(ブロンフェンブレナー 1996)。生後間もない子どもは、最も長い時間を家庭での養育者との直接的な関係の中で過ごし、その中で養育者と強い結びつきを持ち、安心できる関係の中で育っていく。加えて、子どもにとっての家庭は、養育者を通して他の人々や文化にも触れる環境でもある。こうした背景を踏まえ、本実践では赤ちゃんをどのような環境で迎えるか、家庭を中心に考える。

(2) 本実践の目的と講座の概要

本実践は、親となる参加者が家庭において赤ちゃんとかかわりやふれあいのイメージを持ち、赤ちゃんと生活を共にする上での安全な環境に気づくことを目

指して実施した。

具体的には、生後1年程度の発達過程を踏まえた赤ちゃんとのコミュニケーションや遊び、親子で一緒に楽しめる玩具や絵本を紹介する。文学や音楽など、家庭で文化に触れる機会は多く重要なものであるとされる (Geoffrey, C. & Patrycia, K., 2022)。生まれて間もない子どもは、身近な大人を介して環境(文化)に触れる。本実践では、リテラシーではなく親子の関係をつなぐこと、心地よいものにすることを目的として、玩具や絵本の選び方や楽しみ方を紹介した。

また、子どもの不慮の事故(交通事故、自然災害を除く)として、0歳では窒息による事故が他の年齢に比べて最も多いと報告されている(消費者庁2018)。したがって、窒息を防止するためベビーベッド付近の環境での留意点を説明し、窒息に限らず生後5か月頃からの子どもの発達の特性を踏まえ、誤飲の危険性を体験的に知る機会を設けた。以上より、参加者が赤ちゃんとの安心感のあるふれあいを具体的にイメージし、安全な環境づくりを意識できると期待できる。

2. 実践編

(1) 進行表

進行表7：赤ちゃんを迎える環境づくりのヒント

	時間	アクティビティ	支援と準備物
導入	5分	1. 赤ちゃんが育つ環境について ・赤ちゃんが育つ環境として最も長く過ごす家庭の環境に着目	配布資料
展開	35分	2. 赤ちゃんの発達と遊び ・生後1年ほどを目安に、発達過程に即した赤ちゃんとのふれあい方、遊びやコミュニケーションの種類の種類について、玩具や絵本を中心に紹介する。  3. 気を付けたいポイントの紹介 ・発達に伴う特性を踏まえ、赤ちゃんの手の届く所に口に入る大きさのモノがあれば誤飲が発生する可能性について説明する。  ・子ども(3歳頃)の口の大きさといわれる直径約4cmを体験するため、身近な素材を使って、持ち物が通過するか確認する。 ・誤飲を防ぐために小さなモノの置き場所を考える際に、収納場所など部屋全体の模様替えを視野に入れ、同居家族と共に部屋づくりの検討を促す。	玩具：まくらんぼ(木製ガラガラ) /ぬいぐるみ(オーガール/ベビーキューブ/トレンカースロープ)手づくりおもちゃ 絵本  トイレットペーパーの芯 キッチンペーパーの芯
まとめ	5分	4. まとめ ・安全な環境づくりと安心できるやりとりの重要性	

(2) 本実践での参加者の様子

本実践を終え、参加者からは、「今住んでいる部屋をどのように整えたらよいかヒントがあった」などの感想が得られ、本講座の目的は少なからず達成された。紹介した玩具や絵本はこの日のワークショップを通して会場に置いており、参加者自身が自由に手に取り懐かしむ姿や楽しむ姿が見られた。親子の関係をつなぐ環境(文化)に親しむ機会となったと言えるだろう。



## 主要な引用文献

- ・消費者庁 (2018) 『平成30年版消費者白書』 [https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer\\_research/white\\_paper/2018/](https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_research/white_paper/2018/) (2024/9/27最終閲覧)
- ・ユリー・ブロンフェンブレナー (著) 磯貝芳郎・福富護 (訳) (1996) 『人間発達の生態学 (エコロジー) : 発達心理学への挑戦』 川島書店.
- ・Geoffrey Crossick, and Patrycja Kaszynska (著) 中村美亜 (訳) (2022) 『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価 (文化とまちづくり叢書)』 水曜社. 54-56.

## 【8】赤ちゃんの発達って面白い！

上山瑠津子

### 1. 理論編

#### (1) 乳幼児期の子どもの発達

乳幼児期の子どもは、生後5～6年の間に身体的、精神的、そして社会的に急速に変化し、発達していく。この時期の子どもの発達において、特に養育者との関わりは重要となる。発達初期において、子どもが特別な存在 (特定の養育者) と身体的に接触すること (例えば、抱きつく、撫でてもらうなど) は、不安や恐怖などの身体の生理的変動や情動を一定の状態に調整する役割を担っている。幼少期に養育者と安定したアタッチメントを築くことは、新たな環境を積極的に探索することを促し、生涯を通じて重要な意味をもつとされている (明和, 2019)。

近年では、CsibraとGergelyによって、生後すぐから乳児と養育者とのコミュニケーションの中で、知識や技能の伝達が自然に行われるというナチュラル・ペダゴジー理論が提唱されている。この理論では、アイコンタクト、対乳幼児発話、対乳幼児動作誇張、名前の呼びかけといった行為が手がかりとなり、他者とのコミュニケーションについての社会的学習が行われているとされている (奥村・鹿子木, 2018)。

このように、子どもは生後直後から養育者と安定的かつ応答的な関係の中で成長発達していく。この時、養育者も子どもの姿を通して親として育っていく過程にある。そのため、乳幼児期の子どもの行動、時期ごとの特徴や発達の意味を理解していくことは、子どもとの応答的な関わりや子どもの育ちへの見通しを持つ上でも重要になってくる。

#### (2) 本実践の目的と講座の概要

本講座では、参加者の子育て経験の振り返りや今後の子育ての見通しの一助となることを目指し、子どもの育ちの映像視聴を通して発達の姿、養育者との関わり、そして育児環境への理解を深める内容を実践した。具体的には、生後1年間の乳児 (2021年誕生、第一子男児) と養育者 (主に母親) との関わりの映像を用いて、時期ごとの運動、言語、社会的発達の様子、養育者の応答の役割、家庭での物や空間の留意点などについての解説を行った。

## 2. 実践編

### (1) 進行表

進行表8：赤ちゃんの発達って面白い！

	時間	アクティビティ	支援と準備物
導入	5	1. <b>赤ちゃんにまつわるクイズ</b> ・育児経験や知識をふまえた内容を提示する。〈視覚、聴力の発達、コミュニケーションの発達など〉	・資料提示
展開	35	2. <b>乳児 (生後1年間) の子どもの映像を視聴する</b> ・映像の子どもと家庭の背景を説明する ・映像を見る視点 (子どもの動き、養育者の関わり、周囲の環境など) を伝える。 <b>生後3ヵ月頃まで</b> ：表情、養育者の抱きの姿、保健師訪問の様子 (首の座りを確認) を紹介する。 <b>生後4-5ヵ月</b> ：首がすわり、寝返り、意識的に目で物を追ったり、じっと見たりするようになる。 <b>生後6-7ヵ月</b> ：手にしたものを口で確認する時期 (紙敷に注意)。乳児の喃語に対する養育者の応答 (声) に着目する。 <b>生後9-11ヵ月</b> ：探す、見つけるなど探究心が旺盛になる。「指差し」を用いたコミュニケーションが見られる。 <b>生後12ヵ月頃</b> ：言葉や歩行の獲得により、生活範囲が拡大する時期。ひとり立ち、ひとり歩きが見え、音に合わせて体を動かす姿もある	・映像提示 ・運動、言語発達等、時期に応じた子どもの家について適宜解説を行う。
まとめ	10	3. <b>参加者同士の感想の伝え合い</b> ・映像を見て感じたこと、気づいたことを振り返る。	

#### (2) 本実践での参加者の変化

今回、講座間の実施時間の関係もあり、担当講座前の参加者の様子や意識を十分に捉えきれなかった。しかし、参加者からは、「子どもの秘めた力を感じた」「私も (子どもの成長を) 記録していきたいと思った」といった感想が得られた。乳児の姿と養育者との関わりについて発達の視点を踏まえて視聴することで、子育ての喜びや面白さを感じる契機になることがうかがえた。

## 主要な引用文献

- ・明和政子 (2019) ヒトの発達の謎を解く—胎児期から人類の未来まで— ちくま新書
- ・奥村優子・鹿子木康弘 (2018) 乳児期における社会的学習—誰からどのように学ぶのか—, 心理学評論, 61, 191-203

#### IV 感想と総括

対象が妊婦とそのパートナーと限られていることなどで参加者は（助産師の方も含め）4名のみであった。

感想をまとめると、以下のとおりである。

- ① 講座情報の入手経路は、公共施設に配布しているチラシであった。HP等のデジタル情報のみではなく、アナログ情報もまだ捨てられない。
- ② 講座への評価は、「楽しかった」という言葉が目立った。妊娠生活や子育てに直接的に学べた知識内容と共に、アートを通したWSが気分転換になったという。「こういう時間を増やしたい」と、思ってもみなかった自分の感情に気づくなど、生活において心身の多方面に揺さぶりをかけることができた。
- ③ 今後受けたい講座は、一緒に実践できる体験といった書き込みがあり、「繋がる」ことへの希求があるということがわかった。
- ④ アートで安心・安全な気持ちを育むといった本WSのコンセプトは、受け入れられた実感がある。

今回の実践の下敷きにしたのは、Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska (2022)『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』である。大学に市井の人々が集まり、議論や一緒に楽しむ機会を上手に作っている場所はまだ多くはないだろう。大学と地域の行政が連携した異分野グループによるパイロット的WSがThe AHRC Cultural Value Projectの研究成果に基づく「個人の内省」、「アイデンティティ」、「主観的幸福感」などの効果を見出した。

地域の妊娠中の女性及び家族支援を行っていくという姿をさらに増やし、大学側の変革を生み出しながら幸福をともに追求していく姿のため、真の学びを提供していくことに大きな意味が見出された。

#### まとめにおける主要な引用参考文献

- ・東京藝術大学 Diversity on the Arts プロジェクト, 坂口 恭平他(2022)『ケアとアートの教室』左右社
- ・Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska (2022)『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』水曜社

(2024年10月11日受稿, 2024年11月22日受理)

## University-based Preventative Education Incorporating Art in Collaboration with the Child-rearing Generation Comprehensive Support Center

SHOUHO Masae<sup>(1)</sup>, SHIBUYA Kiyoshi<sup>(1)</sup>, KOYAMA Noriko<sup>(1)</sup>, UYAMA Rutsuko<sup>(1)</sup>, YAMAUCHI Kanako<sup>(1)</sup>, TANAKA Naomi<sup>(1)</sup>, WATANABE Maho<sup>(1)</sup>, and HIROTA Yosuke<sup>(2)</sup>

The practical exercise was based on Geoffrey Crossick and Patrycja Kaszynska (2022) 'What is the value of art and culture? - The changes it brings to individuals and society and how they are evaluated'. There are probably not many places where people gather at university and successfully create opportunities for discussion and enjoyment together. Faculty members interested in Art & Care carefully examined the content for expectant mothers, their husbands and parents raising children, and held a series of lectures, making use of their respective expertise. With the support of the Neuvola Promotion Division, the university and local government collaborated to hold a pilot workshop for participants from different fields. The results of the AHRC Cultural Value Project showed positive effects in terms of 'personal reflection', 'identity' and 'subjective well-being'. The university was seen as providing genuine learning opportunities for its citizens, as they pursued well-being together.

Keywords : Art, Care, personal reflection, identity, well-being

---

<sup>(1)</sup>Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University

<sup>(2)</sup>Department of Human Behavior, Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka Metropolitan University